

「フランス文学史」の濫觴

エチエンヌ・パキエの『フランスの探究』第7巻

志々見 剛

エチエンヌ・パキエ（1529-1615）が生涯にわたって書き続けた『フランスの探究¹』は、博搜した資料を基に様々な観点からフランスの過去を論じ、彼の時代に至る一貫性を明らかにしようという、16世紀半ば以降のフランスの歴史研究の金字塔である。その内容は民族や国家や王家の起源とその変遷、種々の人物の逸話といった一般に歴史記述の対象とされる事象にとどまらず、フランス固有の制度や法律、習俗、宗教、大学、さらには文学や言語など、多岐にわたる。これはまた、学問の共通語だったラテン語ではなくフランス語で著されており、広く同国人に自国の歴史と伝統を知らしめんと志すものでもあった²。このうち1607年刊の第7巻は、フランスの詩と文芸に捧げられている。マーガレット・ムーアが夙に指摘するように、これは豊富な資料を用いて「フランスの文学的過去の完全な絵図を初めて提示」するものとして、フランス文学史の濫觴とも言うものである³。

これはまた、およそ半世紀にわたるパキエの研究の集大成でもあった。1555年と日付のある彼のロンサール宛書簡は、中身がほぼそのまま第7巻に転用

¹ 以下引用は Etienne Pasquier, *Les Recherches de la France*, éd. critique sous la dir. de Marie-Madeleine Fragonard et François Roudaut, Honoré Champion, 1996, 3 vols による（RF と略記する）。この作品は、1560年に第1巻を刊行した後、半世紀以上にわたって増補を重ね、著者歿後の1621年に出された版（定本）では全10巻となる。

² パキエはフランス語を執筆言語に選ぶことにより自覚的で、1552年のトゥルネブス宛の書簡で既にこれを主張している（Lettre, I, 2 in *Œuvres complètes*, Slatkine, 1971 [Amsterdam, 1723], t. II, col. 3B sq.）。以下、パキエの書簡はこの全集第2巻から引用する。併せて *Choix de lettres sur la littérature, la langue et la traduction*, éd. Dorothy Thickett, Genève, Droz, 1956 も参照した。書簡の日付については、可能な場合、この選集の註記に従った。

³ Margaret J. Moore, *Estienne Pasquier historien de la poésie et de la langue françaises*, Poitiers, Société française d'imprimerie et de librairie, 1934, p. 92。これは『フランスの探究』第7・8巻を対象に、典拠を示しながらその独自性を見極めようとするもので、20世紀の基準に照らしてパキエが批評家の資質を欠くと繰り返す点を除けば、基礎となる重要な研究である。他に Emmanuelle Morgat-Longuet, *Clio au Parnasse : naissance de l'histoire littéraire française aux XVI^e et XVII^e siècles*, Honoré Champion, 2006 も参照（パキエについては pp. 58-63 ; pp. 101-102）。

されてはいるものの、日付が疑わしいのでしばらく措く⁴。少なくとも、ジョン・クローが1562年のものと推定するロンサール宛の別の手紙では⁵、この巻を執筆中だと述べており、その後、1574年頃には原稿が回覧されていた形跡があるという。1596年版の『フランスの探求』では、フランス詩を扱うものとして第4巻31-33章が設けられた。1607年版ではこれが大きく発展し、第7巻として独立したのである。

詩や文芸を歴史研究の一環として扱おうとするパキエの試みは、当時として斬新ではあったが、同時代の潮流に掉さすものでもあった。16世紀の中葉以降、古典古代やルネサンスのイタリアの糟糠を嘗めるのに慊らず、いわゆる「中世⁶」をも含めた自国の過去に広汎な関心が向けられるようになった。その表れとして、一方ではフランス固有の法律や制度、慣習などを対象とする法学研究の勃興があり⁷、他方ではフランス独自の文学を発展させようとするプレイヤード派などの試みがあった。パキエは、資料批判に熟達した法律

⁴ Lettre, I, 8. パキエの書簡には珍しく年が明記されているが、実際にはより後に書かれたか、後で手直しされている。プレイヤード派の領袖との交誼を強調するための作為であろう (Catherine Magnien, « Ronsard vu par Pasquier », in *Les Figures du poète Pierre de Ronsard*, éd. Marie-Dominique Legrand, *Littérales*, n° 26, 2000, pp. 61-68)。

⁵ Lettre, II, 7, col. 37D. Voir Joan Crow, « Estienne Pasquier, literary historian », *French Studies*, vol. XXII, n° 1, 1968, pp. 1-7. この書簡も日付に疑義はあるが、少なくとも書簡集の刊行された1586年までは遡ることができる (Catherine Magnien, art. cité, p. 78)。

⁶ むろん、パキエやその同時代人たちが用いている言葉ではない。本稿での使用は、あくまで便宜的なものである。

⁷ ビュデが先鞭をつけ、キュジャスらが広めた「フランス派 *mos gallicus*」のローマ法研究は、文献学的な資料批判や歴史相対主義的な観点を導入して、ローマ法のテキストとその変遷を解明しようとするものだった。キュジャスの弟子の世代になると、これはアンドレ・ティラコーやシャルル・デュ・ムーランによるフランス諸地方の慣習法の研究と合流して、フランスの過去全体を対象に収めるようになる。中心となったのはピエールとフランソワのピトゥ兄弟、アントワヌ・ロワゼル、ルイ・ル・カロン、そして本稿で取り上げるフォーシェやパキエらである。彼らは出自や経歴も近く、互いに書籍や資料を貸借し、議論を戦わせていた (Donald R. Kelley, *Foundations of Modern Historical Scholarship : Language, Law, and History in the French Renaissance*, New York, Columbia University Press, 1970, pp. 241-249)。なおパキエは、ビュデ以来のフランスの法学研究を「第三世代」と一括する (*RF*, t. III, pp. 1923-1929)。

家・歴史家として⁸、またロンサールに連なるフランス語・ラテン語の詩人として⁹、双方の流れを汲む稀有な存在だった。

本稿では、16世紀後半から17世紀初めのフランスにおいて、いわゆる「中世」を含む自国の過去の文学がいかに論じられているのかを考察する。初めにパキエ以前の作家たち、特に彼の友人でもあったクロード・フォーシェについて検討し、その上で『フランスの探究』第7巻を中心にパキエがフランスの詩や文芸と、その関してきた歴史とをどのように捉えていたのかを明らかにしたい。

16世紀から見たフランスの過去の文学

16世紀中葉まで

まずは話の前提として、パキエが活躍をはじめた16世紀中葉までの状況を確認したい。この時代、一つの典型的な立場としては、カエサルやストラボンなどに拠って古代ガリアの武勇や習俗、信仰、支配権の卓越を論じる一環として¹⁰、その雄弁や文芸を礼讃するというものがあつた。ジャン・ルメール・ド・ベルジュはゴールの王バルドゥスを「韻 *rhythmes*」の発明者とし、「バルド *Bardes*」と呼ばれる詩人たちが才を競つたとする¹¹。半世紀ほど後のペトルス・ラムスもまた、『古代ガリア人の慣習』（1559）の中で「バルド」の存在を挙げ、古代ガリアの詩文がギリシャやローマに比肩すると主張する¹²。ただ、これらの説は、古代ガリアと現在のフランスを直接に結びつけようとするあまり、間に位置する十余世紀にはほとんど触れることがない。

⁸ 歴史家としてのパキエについては Georges Huppert, *The Idea of Perfect History: Historical Erudition and Historical Philosophy in Renaissance France*, Urbana, The University of Illinois Press, 1970, pp. 28-71; Donald R. Kelley, *op. cit.*, pp. 271-300; Corrado Vivanti, « *Les Recherches de la France d'Etienne Pasquier: l'invention des Gaulois* », in Pierre Nora (dir.), *Les Lieux de mémoire*, Gallimard, 1997, t. I, pp. 759-786; Catherine Magnien-Simonin, « Estienne Pasquier Historien », *Nouvelle revue du XVI^e siècle*, vol. 19, n° 1, 2001, pp. 51-62; 高橋薫『歴史の可能性に向けて——フランス宗教戦争期における歴史記述の問題』、水声社、2009、pp. 21-104 参照。

⁹ パキエは一生涯、詩作を続けた。晩年の1610年にも、若い頃の作品に改作や新作を加えて『若年集 *Jeunesse*』という詩文集を編んでいる。

¹⁰ Voir Claude-Gilbert Dubois, *Celtés et Gaulois au XVI^e siècle*, Vrin, 1973.

¹¹ Jean Lemaire de Belges, *Les Illustrations de Gaule et singularitez de Troye*, in *Œuvres*, éd. Auguste Jean Stecher, Hildesheim-New York, Georg Olms, 1972 [Louvain, 1885], t. I, p. 70. デュ・ベレーもこの説を援用している (Joachim du Bellay, *La Deffence, et illustration de la langue françoise*, éd. Jean-Charles Monferran, Genève, Droz, 2007, p. 154)。

¹² Petrus Ramus, *Liber de moribus veterum Gallorum*, Andréa Wechel, 1559, f. 41 r^o-v^o. これ

では、いわゆる「中世」のフランス文学についてはどうか？ むろん、16世紀においても、これが完全に湮滅したわけではなかった。『薔薇物語』は別格として¹³、騎士道物語も¹⁴、ファブリオや小話の類も¹⁵、読者が絶えることはなく、翻訳や翻案、新作にも事欠かなかった。ただ、これらは一般に、古典古代やルネサンス・イタリアの高尚な作品に伍するものとはされず、文献学や歴史的記述の対象にしようという機運にも乏しかった。実際、他国に対抗してフランス（ガリア）の文学的伝統を宣揚しようという試みは中世から散発的に見られたが、15世紀に至っても、ラテン語の著作以外が俎上に載ることはほぼなかった。5世紀のシドニウス・アポリナリスの後には、寥々たる幾人かの詩人を挙げるか、神学者や哲学者たちまで手を広げるのがせいぜいであった¹⁶。16世紀に入るとようやくフランス語の著作にも光が当たるようになる。だが、この時点では、ラテン語に対抗して俗語たるフランス語を顕揚するのと並行して、俗語文学における先達であり仮想敵でもあるイタリア語（特にトスカーナ語）との関係も問題になる¹⁷。というのも、イタリア語は既にダンテ、ペトラルカ、ボッカチオなどを古典として擁し、かつダンテの『俗語詩論』に遡り、16世紀にもベンボ、スペローニなどが続く俗語論の伝統を誇っていたのである。

とはいえ、フランスの詩や文芸を擁護しようという者でさえ、いわゆる「中世」に関する知識は概して貧弱で、『薔薇物語』を除けばほとんど15世紀以前に遡らず、また時代ごとの差にも無頓着なのが常だった。例えばルメール・ド・ベルジュの『両言語和合論』（1511）はフランス語とトスカーナ語の協働を説き、イタリアとの連続性や類縁性によってフランスの詩と文芸を称揚

については久保田静香「ペトルス・ラムスの国語意識 —— 『古代ガリア人の慣習』（1559）とフランス語顕揚 ——」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第23号、2014年、pp. 15-28 参照。

¹³ 印刷術の普及後も『薔薇物語』の流行は衰えず、揺籃本の時代から1538年まで版を重ね、複数の散文訳も含めて絶えず読まれ続けた。Pierre-Yves Badel, *Le Roman de la Rose au XIV^e siècle : étude de la réception de l'œuvre*, Genève, Droz, 1980, pp. 492-494.

¹⁴ Voir Richard Cooper, « 'Nostre histoire renouvelée' : the reception of the romances of chivalry in Renaissance France », in *Chivalry in the Renaissance*, éd. Sydney Anglo, Woodbridge-Rochester, Boydell Press, 1990, pp. 175-238. フランソワ1世の時代以降の新規の散文訳や、『ゴールのアマデイス』のような比較的新しい作品の翻訳・翻案も多かった。だが、これらの流行は1580年を過ぎると終熄する（p. 191）。

¹⁵ Voir Gabriel-André Pérouse, *Nouvelles françaises du XVI^e siècle : images de la vie du temps*, Genève, Droz, 1977.

¹⁶ Colette Baune, *Naissance de la nation France*, Gallimard, 1985, pp. 303-306.

¹⁷ Suzanne Trocmé Sweany, *Estienne Pasquier (1529-1615) et nationalisme littéraire*, Champion-Slatkine, 1985, pp. 23-40.

しようとするが¹⁸、その論拠はジャン・ド・マンとダンテが同時代の双璧で、互いに知己だったとする事実誤認である。トマ・セビエの『フランス詩法』（1548）も、過去の詩や文芸については大雑把な議論で満足している。曰く、古代ローマの詩の滅亡に続く長い沈滞の後、イタリアでダンテとペトラルカが詩を再興し、その流れがフランスに及んでアラン・シャルティエ、ジャン・ド・マン、ルメール・ド・ベルジュらを生み（順番は本文のまま）、フランソワ 1 世とアンリ 2 世の時代に詩が花開くというのである¹⁹。これも不正確な理解であることは言を俟たない。

デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』（1549）は過去の作品に対してさらに辛辣で、現在との断絶を強調するものだった。彼は「我らの祖先の無知²⁰」を嘆き、「我々の言語の趣味を墮落させる」古い詩を捨てて、未だ貧しいフランス語を古典古代やイタリアの詩の摸倣によって豊かにすべきだと説く²¹。例外として過去の詩人で「唯一読まれるに値する」のはギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンであり、「フランス語の最初の姿で、その古きゆえに敬すべき」もので、現代の詩人にも摸倣すべきものがあるという²²。他には「ランスロ、トリストアンその他の、かの美しい古きフランスのロマン」を素材として、ギリシャ・ローマのものに比肩するフランス語の叙事詩や史書を作るべきだとか²³、それらに現れる古語を詩で用いるのも程度を棄えてさえいれば有効だとか述べるだけである²⁴。なお、いわゆる「中世」だけではなく、16 世紀前半の詩人たちにもデュ・ベレーは冷淡で、「初めてゴールとフ

¹⁸ ルメール・ド・ベルジュは、どちらの言葉がより繊細に恋愛その他の事柄を語れるか、という問題を提起した上で、イタリアの三韻句法とフランスのアレクサンドラン詩形の両方の形式の詩を試みている。彼はまた、1513 年のフランソワ・ル・ルージュ宛書簡でも、ラテン語、トスカナ語、フランス語が「小さな三位一体であるかのように互いに結びついている」と述べる（*Œuvres*, éd. citée, t. III, p. 197）。

¹⁹ Thomas Sébillot, *Art poétique français*, éd. Félix Gaiiffe, nouv. éd. Francis Goyet, Nizet, 1988, p. 14. セビエは、詩における「発想」を論じる際にもシャルティエとド・マンを「フランス（語）の優れた古典的な詩人」として挙げる。ただ、現代の詩人は彼らよりもクレマン・マロ、メラン・ド・サン＝ジュレ、ユーグ・サレル、アントワヌ・エロエ、モーリス・セーヴらのより新しい詩人を参照すべきだという（*Ibid.*, p. 26）。

²⁰ Joachim du Bellay, *La Deffence, et illustration de la langue françoyse*, éd. citée, p. 79.

²¹ *Ibid.*, pp. 131-132.

²² *Ibid.*, p. 121.

²³ *Ibid.*, pp. 139-140.

²⁴ *Ibid.*, p. 148. ペルティエ・ド・マンやロンサールも同様の見解を示す（n. 88）。

ランス語を顕彰した」ルメール・ド・ベルジュの他は²⁵、マロとエロエの名を挙げるにとどまる²⁶。

『擁護と顕揚』への反論であるバルテルミー・アノーの『カンティル・オラシアン』（1551）は、デュ・ベレーの言う「我らの祖先の無知」を否定しようとするが、フランスの過去の文学についての知識は心許ない。彼はロリス、ド・マンに続けてギョーム・アレクシス、ニコル・オレーム（アリストテレスの仏訳者）、シャルティエ、ヴィヨン、メシノの名を列挙してフランスの過去を称えるものの、それ以上に議論を深めることはない²⁷。

こうした中、僅かに例外と言えるのがジョフロワ・トリーの『百花の園』（1529）である。彼は「ガリアのヘラクレス」を挙げて古代ガリアに淵源する雄弁の伝統があると主張するだけでなく、友人であるルネ・マスに借りた写本を元に『アレクサンドロス物語』の著者たちやクレチアン・ド・トロワを称賛し、中でも前者については「もし今日のような文芸の花開く時代にいたのなら、すべてのギリシャ・ローマの著作家たちを凌駕していただろう²⁸」とさえ言う。近い時代に関してもシャルティエ、シャトラン、クレタンの名を挙げ、詩と文芸の隆盛を称える²⁹。この話題を扱う箇所は二ページにも満たず、作品全体から見れば些少な部分を占めるに過ぎないが、いわゆる「中世」の文学を再評価する嚆矢となった点、意義深いものである。

フォーシェ『フランスの言語と詩、韻文、ロマンの起源に関する選集』

パキエの旧友でもあるフォーシェは、まったく新しい観点から中世のフランス語文学に迫った³⁰。彼は、畢生の大作たる『ゴールとフランスの古代³¹』を編むかたわら、1581年に『フランスの言語と詩、韻文、ロマンの起源に関

²⁵ *Ibid.*, pp. 122-123.

²⁶ *Ibid.*, p. 94. 名こそ明示しないが、メラン・ド・サン＝ジュレ、セーヴにも手厳しい批判を向けている（pp. 123-124）。

²⁷ Barthélemy Aneau, *Quintil horacien*, in *Traité de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, éd. Francis Goyet, Le Livre de poche, 1990, p. 185.

²⁸ Geoffroy Tory, *Champ fleury*, éd. Gustave Cohen, Slatkine, 1973, f. III v°.

²⁹ *Ibid.*, f. IIII r°.

³⁰ フォーシェと中世文学については Janet G. Espiner-Scott, *Claude Fauchet : sa vie, son œuvre*, Genève, Droz, 1938, 2^{ème} partie « Fauchet, historien de la littérature française », pp. 113-244 ; Geneviève Clérico, « Claude Fauchet et la littérature médiévale des origines », in Yvonne Bellenger (dir.), *La Littérature et ses avatars*, Aux Amateurs de Livres, 1991, pp. 73-88 参照。

³¹ この著作はフランスの起源からカロリング朝断絶（987年）までを扱う。最初の二巻に当たる部分は1579年に出版されたが、世情の混乱のため完成は遅れ、1599年によりやく第一部が刊行される。全編が出版されたのはフォーシェ歿後の1602年だった。

する選集³²』という比較的短い著作を上梓した。この著作は二部に分かれ、第一部は言語の発生と変遷、詩や押韻の起源といった総論に加え、フランス語の成立と展開、ロマンを初めとする中世の詩や文芸、トゥルヴェールやジョングルールといったその担い手について論じる。第二部は「1300年より前に生きたフランスの詩人」127人をおおよそ年代順に挙げて、作品の抜粋や伝記、書誌などを記す³³。扱うのは名前の分かる詩人に限定され、『ブリュ物語』の作者とされた12世紀半ばのウスタース師 (M. Eustace) に始まり³⁴、フィリップ4世か6世の頃の詩人とされるピエール・ジャンティアンで終わる。二行ほどの簡単な記述から、複数の引用を含む数ページにわたるものまで、詩人ごとに長短は様々である。

パキエの場合と同様、フォーシェの中世への関心は1550年台の中頃に端を発する³⁵。彼がこの「かつて知られていなかった深淵³⁶」に光を当てるのは、学問的な探究心の発露であると同時に、宗教的・政治的な分裂に晒された同時代のフランスに対して、フランス固有の伝統とそれに根差した文化的・歴史的な一体性を宣揚するためでもあった。アンリ3世宛の献呈書簡で、過去に遡って「フランスという名の栄光」や「この王国の榮譽」を明らめた上で、王の庇護の下、それを継承して新時代の詩や文芸が花開くことを冀うのは、その表れである³⁷。

フォーシェの『選集』は、彼の歴史的な著作と同じように、可能な限り典拠を示し、具体的なテキストに基づいて議論を行おうとする点でも劃期的だった³⁸。例えば、フランス語の発生を論じる際には「ストラスブールの宣誓」

³² 以下引用は Claude Fauchet, *Recueil de l'origine de la langue et poesie françoise, ryme et romans. Plus les noms et sommaire des œuvres de CXXVII poètes françois, vivans avant l'an MCCC*, in *Œuvres*, Slatkine, 1969 [Paris, David Le Clerc et Jean de Heuqueville, 1610], t. II により、*Recueil* と略記する。

³³ 1300年以降の詩人たちについても別の著作を構想していたというが (*Recueil*, f. 591 v^o)、完成には至らなかった。

³⁴ ウェースのこと。他にも Wistace, Huistace など表記に揺れがあった。

³⁵ 後にこの『選集』の一部となる、1555年に書かれた草稿が残る (Janet G. Espiner-Scott, « Claude Fauchet and Romance Study », *The Modern Language Review*, vol. 35, n° 2, 1940, p. 173)。『選集』でも彼は、「25年前」——出版の時点から遡れば1556年にあたる——にジャン・ド・マンの伝記の執筆を志したとする。資料蒐集の一環としてジャコバン修道院で彼の墓を探したが見つからなかったという (*Recueil*, f. 591 r^o)。

³⁶ *Recueil*, f. 591 v^o。

³⁷ *Recueil*, sig. BBBBbbb ij v^o。

³⁸ ほとんどの場合、フォーシェは元のテキストをそのまま引用するが、必要に応じて言葉を改めることもある。例えばシャプランについては「著者の意味に最も近づけて、さらにその時代を見出せるように彼自身の言葉を多く留めながら」散文に直

の一節を引いて検討し、これが当時のラテン語と異なる「ロマンス語 *langue Romande*」に属すると結論づけている³⁹。

詩を引用する際にも、典拠やその出所にしばしば言及し、不完全なテキストしか参照できなかった場合にはそう断っている⁴⁰。資料としては、彼自身が入手したもの——例えば『聖杯物語』の断片を記した羊皮紙教葉は、印刷機の抑え蓋にされそうになっていたのを彼が救い出したものだった⁴¹——に加えて、王の図書館や⁴²、ピトゥ、パキエ、アントワヌ・マタレルといった友人知人の蔵書も活用する⁴³。中でもアンリ・ド・メーム蔵の詩選集の写本からはティボー・ド・シャンパーニュからラ・マンシュ伯（誰かは敢えて特定していない）にいたる 64 人の詩人を引く⁴⁴。フォーシェはさらに、広く読者にも、世に知られていない書物を所持していたら死蔵しないようにと訴えている。彼の目的は「フランスの古代についての何らかの知識を引き出す」ことであり、どんな粗笨な著作でも、「少なくともその時代の証言として何かの時に役立つものはない」。実際、必ずしもこの『選集』についての言葉ではなかるうが、次のようにも言う。「平民の日録は歴史のいくつかの個所で大いに私を助けてくれたので、私は、著名な出来事を忠実に記録する者たちを紙の無駄使いとは呼べない。彼らがどれほどまづい構成や言語を用いていてもである⁴⁵」。

フォーシェにおいては、詩を論じるにあたっては、審美的・文学的な観点よりも歴史的・伝記的な関心が強い⁴⁶。古い詩を言語の変遷を論じるための素材として用いるだけではなく、詩に現れる歴史的な出来事や詩人の生涯への言及を、例えば『フランス大年代記』、ジョアンヴィル、『アキテーヌ年代記』、「私の手許にある年代記」などと照合している⁴⁷。

している (*Recueil*, ff. 580 v°-582 v°)。

³⁹ *Recueil*, f. 538 v°. *Langue Romaine rustique* とも呼ばれる。

⁴⁰ 例えば *Recueil*, f. 562 r°。

⁴¹ *Recueil*, f. 558 r°-v°。

⁴² *Recueil*, f. 575 r°。

⁴³ *Recueil*, f. 549 v° (Pithou) ; f. 575 r° (Pasquier) ; f. 584 r° (Matharel)。

⁴⁴ *Recueil*, f. 564 r°。ド・メーム蔵の写本は始まりの部分欠く。この写本では、ラ・マンシュ伯以降も 200 以上の詩が続くが、ジョリヴェ・ド・バリを除いて匿名だという。フォーシェは、「私は読むのに退屈したので、思うに、読者よ、あなたも劣らず退屈することになるだろう」と言って引用を打ち切っている (*Recueil*, f. 577 r°)。

⁴⁵ *Recueil*, f. 591 v°。

⁴⁶ Emmanuelle Mortgat-Longuet, *op. cit.*, pp. 97-98。

⁴⁷ *Recueil*, f. 564 v° et f. 591 v° (*Grande chronique*) ; f. 568 v° (Joinville) ; f. 590 r° et f. 591 r° (*Chronique d'Aquitaine*)。彼の所蔵する「年代記」には f. 567 r°で言及がある。

詩や言語を通して歴史を考えることは純粋に学問的な問題にはとどまらない。なぜなら「言語は、それを用いる君主たちの伸長に応じて力を増す⁴⁸」であり、フランスの詩や文芸の伸長も同様に説明されるからである。曰く、諸侯が強かった時代には各宮廷の方言でロマンが書かれたが、カペー朝が興隆するとパリ近郊の言葉がフランス語として他を押し、ノルマン征服後にはイギリス、シチリアから中東にまで広がった。その上、フランスが学問（パリ大学）、流行（フランス宮廷）、宗教（アヴィニョン教皇庁）などの面で影響力を増すに従ってフランスの言語や文学の地位も向上した⁴⁹。フォーシェは、これが一旦は退潮してしばらくイタリアの後塵を拝するに至ったことを認める。だが、フランスの勢威が恢復しつつある昨今、「フランソワ 1 世の治世以来現れた多くの優れた詩人たち⁵⁰」——その頂点は「我がフランス詩の王者⁵¹」であり、男性韻と女性韻の交替を発明したロンサール——を得て、新たな盛期を迎えようとしていると言う。

私が思うに、もし学識ある人々が彼らの考えを我らの俗語で書き続けてくれれば、日々これを豊かならしめ、失われた榮譽を我々に返してくれるだろう。それはギリシャ・ラテンの書物の多数の忠実な翻訳のおかげであるが、（私の意見では）さらに多く、フランス詩の隆盛のために精神の活力を傾注している多くの博識な人々のおかげである。日々、彼らはフランス詩をとでも高く称揚している。彼らは既に、アウグストゥスの時代以降に韻文を書いたすべての人々を凌駕しており——私はイタリア人も例外としないし、スペイン人は言うに及ばない——、我らの言語が、かつてそうであったように、他の国々からも求められるようになることを望みうるほどである⁵²。

フランソワ 1 世の時代以降のフランスは、いわば花咲く庭園であり、他国の詩人たちも花を摘みに来るようになった。荒寥たる荆棘の野しかなかった父祖の時代から、面目を一新したのである⁵³。このような言語の再生の一助として、フォーシェは古語の活用が有用だと述べ、詩を論じる合間に、袖註で語釈を示したり、語の来歴を論じたりしている。

最後に考えるべきはイタリアとの関係である。そもそも主題からして、フォーシェがダンテに始まるイタリアの俗語論や詩論に多くを負っているのは

⁴⁸ *Recueil*, f. 543 v^o.

⁴⁹ *Recueil*, f. 544 r^o-v^o.

⁵⁰ *Recueil*, ff. 544 v^o-545 r^o.

⁵¹ *Recueil*, f. 554 v^o.

⁵² *Recueil*, f. 544 v^o.

⁵³ *Recueil*, f. 545 r^o.

疑いを容れない⁵⁴。また、彼は 1550 年代初頭にイタリアを訪れた際にスペローニの知遇を得ており、およそ 30 年後に出版したこの『選集』を一部贈呈しているほどである⁵⁵。だが、同時に、『選集』には、デュ・ベレーやアンリ・エチエンヌにも通じるイタリアへの対抗意識が見え隠れする。プロヴァンス詩がダンテやペトルカに与えた影響を強調するのはまだよいとして⁵⁶、ダンテとボッカッチョがパリ大学に学んだとして彼らの作品に「全くフランス的な無数の言葉や話し方」が見られるとしたり、『デカメロン』がフランスの古いファブリオを翻案していると繰り返したりするのは、鼻根の引き倒しの感もある⁵⁷。ロマンについても、フランスのものがすべての他国の作品の源泉になっていると誇り⁵⁸、同時代のイタリアのロマンゾ論に反駁して、これが「ゴールないしはフランスの詩の一種」だと揚言している⁵⁹。

フォーシェの『選集』は、熟達した歴史家である彼にとっては余技でしかなかったかもしれないが、量においても質においても、フランスの過去の文学に関する彼以前の議論を遙かに凌駕している。歴史家という立場ゆえに詩を何らかの資料として扱おうとする傾向は否めないが、「中世」に遡ってフランスの言語と文学の起源と発展を明らかにしようとする点、そして過去の特定の時代の詩人たちについて、詩句の引用を含んだ総攬的な目録を作成しようとする点、これは劃期的であり、後世にも大きな影響を与えた⁶⁰。

『フランスの探究』第 7 卷

パキエの『フランスの探究』第 7 卷は、フォーシェの『選集』のおよそ四半世紀後に刊行された。内容は大きく二つに分かれ、1-6 章では彼の時代に至

⁵⁴ Espiner-Scott, *op. cit.*, p. 125 ; p. 139.

⁵⁵ *Ibid.*, p. 16.

⁵⁶ *Recueil*, f. 544 v° ; f. 564 v°.

⁵⁷ *Recueil*, f. 544 v°. 『デカメロン』に関しては f. 567 r° (*Décameron*, IX, 4) ; f. 548 v° (IX, 10) ; f. 584 r° (VII, 5 et IX, 6)。フォーシェはファブリオを「虚構を交えた小話として手慰みに作られたお話で、最後にはだいたい何らかの道徳的な解釈がある」(*Recueil*, f. 557 v°) とし、フランスの文芸の一端を担うものと考えている。

⁵⁸ *Recueil*, f. 544 v°.

⁵⁹ *Recueil*, f. 542 r°. イタリアの理論家たちはロマンやロマンゾの起源を語源によって説明しようとし、ジラルディはギリシャ語の *ρόμη* (力) を、ピニャは *Remensi* (テュルパンが大司教だったランスの住人) という語を挙げる。Pascale Mounier, *Le Roman humaniste : un genre novateur français 1532-1564*, Honoré Champion, 2007, p. 43 参照。

⁶⁰ 例えばアントワヌ・デュ・ヴェルディエの『ビブリオテーク・フランセーズ』(1585) の「ロマン *Romans*」の項は、多くの部分をフォーシェに依拠している。

るフランス詩の歴史的な展開を通時的に論じ、7-14章ではフランス詩の特徴やラテン語・イタリア語詩との比較、詩的な遊戯といった多様なテーマをやや散漫に論じている。

パキエがこの巻で「我々がフランスの詩」を論じるのは、『フランスの探究』全体のテーマに即して「我々の古きゴール人、フランス人」を論じる一環としてである⁶¹。フォーシェの『選集』とは、いわゆる「中世」を含むフランスの過去の文学を取り上げる点では共通しながらも、かなり色合いが異なる。最大の相違は、歴史家であると同時に詩人でもあるパキエの立場を反映して、詩を自律的な、固有の歴史と問題を有するものと見做す点である。フォーシェがひとからげに扱っていた文学と言語も、それぞれ7巻と8巻に分割されている。パキエによれば、両者はそれぞれ時代を逐って変化するが、その軌跡は連動こそすれ一致はしないのである。

なお、「フランスの詩」を論じるとは言い条、そもそもフランスとは何か、詩とは何かという点は必ずしも厳密ではない。フランスについては当時のフランス王国の地理的領域を漠然と想定することとどまり⁶²、この地で生み出されてきた詩や文芸の全体が対象となる。それゆえフランス語だけでなく、ラテン語や、(やや躊躇はあるが)プロヴァンス語の作品も含まれる⁶³。また、彼の扱う作品の大半は韻文だが、散文のロマンはむろん⁶⁴、『パトラン先生⁶⁵』、種々の翻訳⁶⁶——ニコル・オレームのアリストテレス、エチエンヌ・ドレのキケロ、ニコラ・ド・エルブレの『アマディス』など⁶⁷——、さらには彼が

⁶¹ RF, t. II, p. 1371.

⁶² Edith Karagiannis-Mazeaud, « A l'aube de l'histoire littéraire : la méthode d'Etienne Pasquier dans le livre VII des *Recherches de la France* », in Luc Fraisse (dir.), *L'Histoire littéraire à l'aube du XXI^e siècle : controverses et consensus*, PUF, 2005, p. 31.

⁶³ パキエは「我々のフランスの俗語」に対してプロヴァンス語を「彼らの言語」とする一方で (RF, t. II, p. 1393)、プロヴァンス詩のイタリアへの影響を述べる際には「我々のプロヴァンス人」と呼ぶ (p. 1394 ; p. 1399)。

⁶⁴ デュ・ベレーと同様、パキエは、これらのロマンも「うまく活用できる人の筆にかかれれば、我々の言語を進展させ昂揚させるために利益を引き出しうる」とする (RF, t. II, p. 1399)。

⁶⁵ パキエ曰く、「このファルスは全体においても部分においてもギリシャやローマの喜劇に匹敵する」 (RF, t. II, p. 1406)。第8巻59章ではこの作品に由来する様々な表現を取り上げて解説している (t. III, pp. 1691-1698)。

⁶⁶ 第8巻でも、セセルやアミヨの翻訳がフランス語を刷新したと称える。とりわけアミヨは「何の技巧もなしに、我らの言語の美しさと甘美さのすべてを極めた」と絶賛される (RF, t. III, p. 1519)。

⁶⁷ RF, t. II, p. 1405 ; p. 1410. 特に『アマディス』第8巻の仏訳のことは、「我々のフランス語のすべての美しい花をそこで摘み取ることができる」と称えている。

敬慕してやまないラブレーまで⁶⁸、等しく俎上に上っている。詩という名のもとに、文学全般を広く包摂しているのである。

典拠 —— 二次資料の活用と個人的体験の喚起

狹義の文学史を扱う 1-6 章を見る前に、まずはパキエの議論の全体的な特徴を、主にフォーシェとの対比を通じて確認してみたい。

まずテキストの用い方について見ると、フォーシェがテキストの資料的な価値を重んじて可能な限り一次資料からの正確な引用にこだわったのに対し、パキエはあくまで行論の必要性に応じて詩を引用するにとどまる。そのため孫引きはもちろん、不正確な引用もままある⁶⁹。

中世詩に関する主要な典拠はフォーシェの『選集』であり、書簡では『ビブリオテーク・フランセーズ』を編もうとするクロワ・デュ・メーヌにこれを推奨している⁷⁰。また、トリーの『百花の園』も「学識と知識に満ちた本」としてしばしば参照し、クレチアン・ド・トロワなどについてはその簡潔な記述に基づいて論じている⁷¹。プロヴァンス詩に関してはジャン・ド・ノートルダムを選集を主に用い、併せて自身の手に落ちたベンボ旧蔵の写本も参照したという⁷²。他にも、「親友の一人」であるロワゼルが刊行したエリナン『死の詩』なども参照している⁷³。

むしろ、パキエ自身も、機を捉えては古いテキストを探索している。彼が最初のフランス語詩として挙げるのはアベラールによるエロイズへの愛の詩だが、これは彼の所有するアベラール書簡集の写本に言及されているとい

⁶⁸ *RF*, t. II, p. 1409. パキエ曰く、「彼 [=ラブレー] は、あらゆるものを馬鹿にしながら彼が表した快活さにおいて、比類なきものとなった。私はとて言えば、非常に奔放な精神をもっているとはっきり自負しているもので、これを読むのに倦むことは全くなかったし、笑ったり、同時に、それを読んでそこから自分の利益を引き出したリするような材料を見つけないことは決してなかった」(*RF*, t. II, p. 1410 ; p. 1478 も参照)。1555 年付のロンサール宛の書簡でも「博学なるラブレーは、ガルガンチュアとパンタグリュエルにおいて賢者のようにふざけ、人々の間で称賛を博した」とする (*Lettre*, I, 8, col. 11C)。

⁶⁹ Moore, *op. cit.*, p. 56.

⁷⁰ *Lettre*, IX, 9, col. 239C. 1581 年の書簡とされる。

⁷¹ *RF*, t. II, p. 1386 ; p. 1407. クレチアン・ド・トロワについては p. 1392 も参照。

⁷² *RF*, t. II, p. 1395.

⁷³ *RF*, t. II, p. 1383. Voir aussi t. I, pp. 671-672. この版はフォーシェに献じられている。

う⁷⁴。彼は他にも、ティボー・ド・シャンパーニュの詩を含む詩選集や⁷⁵、おそらくはレオニヌス（またはレオニウス）のラテン語押韻詩の写本も手にしていた⁷⁶。フォンテーヌブローでのフランソワ 1 世の蔵書からはフロワサールの写本を発見し、その長大なタイトルを転記している⁷⁷。15 世紀末の詩についてはブロワで閲覧したという「ある古いフランス詩法」—— 実際はジャン・モリネの詩法 —— に多くを負い⁷⁸、そこに引用されていたアルヌー・グレバンの詩句を三連しか転写しなかったことを後悔している⁷⁹。

アンリ 2 世の時代以降は、パキエ自身が詩人として活動し、またプレイヤーード派その他の詩人たちと親交を結んでいたゆえ⁸⁰、個人的な知識や体験をもとに語るようになる。端々には私的な追憶さえ混じる。例えばベーズの『アブラハム』を読んで「かつて目から涙が流れた⁸¹」ことや、ジョデルの『クレオパトラ』と『邂逅』がボンクール学寮で上演されて満場の喝采を浴びた場に「偉大なトゥルネブと同じ部屋で、その場に居合わせた⁸²」ことを書きとどめている。あるいはジョデルがロンサールへの対抗意識を剥き出しにして、朝には後れを取っていても夕には追い抜いて見せると豪語していたことを回想する⁸³。こうした挿話は、客観的に見れば些末な事柄に過ぎないのだろう

⁷⁴ RF, t. II, pp. 1382-83. むしろ実際の詩は後世に伝わらず、パキエが実際に見たわけではない。なお、第 6 巻 17 章は、この書簡集を元にアベラールの生涯を詳述する (pp. 1231-1241)。

⁷⁵ Lettre, II, 7, col. 39C. この写本は現在フランス国立図書館の所蔵 (fr. 765)。パキエはこれを全編ティボーの作と推定するが (col. 42D)、実際は他の詩人の作品も含む (Suzanne Trocmé Sweany, *op. cit.*, p. 84)。Colette Demaizière, « Etienne Pasquier, lecteur de Thibaud de Champagne », in *Thibaud de Champagne, prince et poète au XIII^e siècle*, éd. Yvonne Bellenger et Danielle Quéruel, Lyon, La Manufacture, 1987, pp. 110-127 も参照。

⁷⁶ RF, t. II, p. 1375. パキエはこれを「それ以前の時代の野蛮さ」を感じさせない優れた詩と高く評価する。なお、彼はこの詩人の名を「レオナン詩形」の由来とするが、フォーシェはこの詩形が法皇レオ 2 世に由来すると主張していた (*Recueil*, f. 545 v^o)。

⁷⁷ RF, t. II, p. 1405.

⁷⁸ RF, t. II, p. 1373 ; p. 1404 ; p. 1407 ; p. 1475.

⁷⁹ RF, t. II, pp. 1407-1408.

⁸⁰ 実際にパキエがプレイヤーード派の詩人たちとどの程度親密だったのかは心許ない。ル・カロン『対話集』(1556)所収の「ロンサール、あるいは詩について」において、ロンサールとジョデルが、将来を嘱望された弁論家たるパキエ、フォーシェと対話する趣向をとるといった事例はあるが、「ブリガッド」の主要な出来事に彼が立ち会った形跡は稀であり、ロンサールらが彼に言及することも少ない。ただ、少なくとも、『フランスの探求』のこの巻を書くパキエがロンサールらとの近しさを読者に印象づけようとしているのは確かである。

⁸¹ RF, t. II, p. 1412.

⁸² RF, t. II, p. 1416. 『邂逅 *Rencontre*』は散逸した喜劇。

⁸³ RF, t. II, pp. 1419-1420.

が、彼の青春がプレイヤー派の昂揚と交わった一時代の証言として掬すべきものである。

発想法としての比較

パキエのもう一つの特徴は、「学者であるだけでなく文芸批評家である⁸⁴」者として振る舞うことである。フォーシェがいわば「学者」一辺倒に過去の一つの時代のフランス語詩を網羅的に示そうとしたのに対し、彼は作品に価値判断を下し、取捨選択した上で、彼自身の見地からフランスの文学が闊してきた道筋を明らかにしようとする。

その際、パキエは何らかの絶対的な判断基準を掲げるわけではない。むしろ、機に応じて、様々なレベルでの比較によって個々の特徴を浮かび上がらせ、時には優劣をつけるのがパキエの好む手法だった。個々の詩人については、例えばギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マン、メラン・ド・サン=ジュレとクレマン・マロ、ロンサールとジョデルやデュ・ベレーなどを比較して論評している⁸⁵。より大きな枠組でも、例えば自分の時代のフランス詩の隆盛を示すために、第8章ではイタリア詩と、第9・10章では古典ラテン詩と比較している。前者についてはアリオスト、ベンボ、テバルドに対してロンサール、バイフ、デポルトおよび自分自身の同主題の詩を対置し、もはやイタリア人が優越を誇ることはできないと断定する⁸⁶。後者については、パキエは良き人文主義者として古代の卓越を認め、これに少しでも異を唱えることが「古代への冒瀆」や「異端」と見做されかねないと認めつつも⁸⁷、「ルビコンを渡る⁸⁸」覚悟で「我々の言語はラテン語に劣らず大胆な詩的表現ができる」ことを示そうとする⁸⁹。カトゥルス、オウィディウス、ウェルギリウスの詩句に対して、マロ、ペルティエ・ド・マン、デュ・バルタス、パキエ、ロンサールのものを並べ、同じ主題を扱っても「ラテン人と並ぶどころか、時には凌駕する⁹⁰」と結論づけるのである。

とは言え、とりわけ古代と現代の比較といった議論含みのテーマの場合、パキエは自分の判断を読者に押し付けぬよう慎重を期している。彼は「時と

⁸⁴ Suzanne Trocmé Sweany, *op. cit.*, p. 80.

⁸⁵ ロリスとド・マン (RF, t. II, p. 1388)、サン=ジュレとマロ (p. 1409)、ロンサールとジョデル (p. 1418)、ロンサールとデュ・ベレー (pp. 1423-1424)。

⁸⁶ RF, t. II, p. 1434.

⁸⁷ RF, t. II, p. 1446 et p. 1453.

⁸⁸ RF, t. II, p. 1440.

⁸⁹ RF, t. II, p. 1444.

⁹⁰ *Ibid.* ; voir aussi p. 1453.

して我々を古代への過剰な盲信に導いてしまう尊敬の念」に囚われぬよう読者を戒める一方で、「各人が祖国に対して自然に有する並外れた愛情」に自分が流されてしまう虞もあると述べる⁹¹。こうした自戒の上でパキエは、ロンサールとウェルギリウスを比較し、「我々のフランス語が、ラテン語と同様、良き筆にかかれれば素晴らしい考えを表現する上で何も欠いてはいない⁹²」ことを自らの結論としている。

詩の快樂——遊戯と実験

パキエはまた、詩人としての立場を踏まえて、詩や文芸のもたらす快樂を強調する点でも特異である。しばしば指摘されるような言語上の関心や政治的な底意、道徳的な訓導といった要素ももちろん彼の動機として重要である⁹³、それにとどまらず彼は詩や文芸を、喜びや楽しみによって律せられる独立した領野として捉えようと試みる。

彼においては、快樂の追求こそが詩人の創意工夫の原動力であり、詩の成立や発展を促すものである。そもそも「何とも言えぬ韻の甘美さは我々の精神の中に入り込んでいる⁹⁴」し、押韻やアレクサンドラン詩形の発明と普及はそれらが「心地よい agreeable」からである⁹⁵。ロンサールが定めた男性韻と女性韻の交替も「男女の E に我々の言語の甘美さはかかっている⁹⁶」ゆえに斬新だったとする。なお、パキエは「この新しい工夫」と「我らの古い詩人たちの無頓着さ」のいずれがよいかには議論があるとした上で、彼自身は「今の慣用」に従って、「新しく改められた方の側」につくと明言する⁹⁷。

詩的な遊戯や実験もパキエの大きな関心事だった。一行ごとにプロヴァンス語、トスカーナ語、フランス語、ガスコーニュ語、スペイン語と変わるランボー・ド・ヴァケイラスの詩の「愉快な多彩さ」を称えたり⁹⁸、ラテン語詩に脚韻を導入するレオナン詩形や⁹⁹、フランス語で敢えてギリシャ・ローマ風

⁹¹ *RF*, t. II, p. 1455.

⁹² *RF*, t. II, p. 1456 voir aussi pp. 1492-1493.

⁹³ 例えば *RF*, « Introduction », éd. citée, t. I, p. 30 ; James H. Dahlinger, *Etienne Pasquier on ethics and history*, New York, Peter Lang, 2007, pp. 105-115 など。

⁹⁴ *RF*, t. II, p. 1465. 韻の発明をフランスのものとしたフォーシェとは異なり、パキエは俗語の詩が一般に韻を持つと考える。彼によれば、ギリシャ・ローマ詩の韻律がむしろ特殊なのである (*RF*, t. II, p. 1374 ; p. 1426)。

⁹⁵ *RF*, t. II, p. 1374 ; p. 1386.

⁹⁶ *RF*, t. II, p. 1470 voir aussi p. 1432.

⁹⁷ *RF*, t. II, pp. 1432-1433.

⁹⁸ *RF*, t. II, pp. 1397-1398.

⁹⁹ *RF*, t. II, p. 1375.

の韻律で詩を作る試みを取り上げたりする¹⁰⁰。これら多様な試みの中には、「名状しがたい甘美さ」を備えたロンサールの無韻詩のごとき成功例もあれば¹⁰¹、1550年代にジョデル、アルシノワ伯、パキエらが試みたような実験作もあれば、その十年後にバイフが作ったような顕著な失敗例もあるという¹⁰²。だが、このような様々な可能性の摸索こそが詩のさらなる発展を促す契機となるのである¹⁰³。

12-14章は、使用する単語の音綴数に制限を加えた詩や「木霊詩」——句末の1、2音綴が次行の冒頭で繰り返されるもの——、折句や回文、尻取り歌などの遊戯的な詩を取り上げる。古くはアウソニウスが得意とし、近年ではラテン語でもフランス語でも多くの試みがあるという¹⁰⁴。パキエは、これらがあくまで「好奇心」に関わる「暇潰し」であり、「タピスリーの中のグロテスク」として論じるだけだと断るが¹⁰⁵、その実、彼はこの種の詩を多く収めたエチエンヌ・タブロの『雑詠集』を絶賛するだけでなく¹⁰⁶、自らも熱心に実作に手を染めていた。

私がとても誇りに思うのは、今の時代、我々フランス人がこの主題について古代を顔色なからしめていることだけでなく、僥倖あって私とその第一の推進者であったことだ¹⁰⁷。

さらにパキエは、彼の文章を読んだ若い読者が「すべての古代に挑戦しようという新たな欲望」を掻き立てられ、この種の詩を作って彼に見せに來たと誇らしげに伝えている¹⁰⁸。ささやかな分野とは言え、彼自身も世代を繋ぐ一つの環として役割を果たしたことを喜んでいるのである。

¹⁰⁰ *RF*, t. II, p. 1473. パキエ自身も「とりわけ推奨すべき人物であり、かつ新奇なことを非常に好むラムス」に促されてフランス語で六歩格と五歩格の長い詩を書いてみたことがあるという (p. 1464)。

¹⁰¹ *RF*, t. II, p. 1373.

¹⁰² *RF*, t. II, pp. 1463-1465.

¹⁰³ 古典詩の韻律を用いたフランス語詩に関するパキエの分析については、伊藤玄吾「エチエンヌ・パキエの韻律論：『フランス考』第7巻を中心に」、『関西フランス語フランス文学』13号、2007年、pp. 24-35 参照。

¹⁰⁴ 例えば「木霊詩」を見ると、ラテン語ではジャン・スゴン（この発明者とされる）とパキエ、フランス語ではデュ・ベレー、タブロ、マロ、そして時代を遡ってクレタンが挙げられる。

¹⁰⁵ *RF*, t. II, p. 1494.

¹⁰⁶ そもそもこの主題を扱ったタブロ宛の書簡 (*Lettre*, VIII, 12) が、この章の下敷きになっている。

¹⁰⁷ *RF*, t. II, p. 1485.

¹⁰⁸ *RF*, t. II, p. 1484 et p. 1491.

文学の盛衰——パキエによる概観

以上のように、パキエは詩人として、ないしは「文芸批評家」として、フォーシェとは異なる見地からフランスの過去の文学に迫っている。では、それが闊してきた歴史自体について、パキエはどのように理解しているのか？ここで改めて、時代を逐ってフランスの詩と文芸の盛衰を語る第7巻の1-6章に目を向けたい。

フォーシェが言語や詩の起源や黎明期それ自体を説明すべき対象としたのに対し、パキエはむしろアンリ2世の時代以降の現在に主眼を置き、そこに至る過程として過去を辿ろうとする。トロクメ・スウェアニは、プレイヤード派が古典古代やイタリアを鑑仰と摸倣の対象としたのに対し、パキエはそれをフランスの過去にまで拡大したとするが¹⁰⁹、実際にはいわゆる「中世」が独立して論じられるわけではない。

パキエの目指すのは、いわば歴史に裏打ちされたフランスの詩や文芸の擁護と顕揚だった。巻の冒頭では次のように言う。

詩人たちがその著作によって死者たちを甦らせるのであれば、私は、我が筆の特権によって、我らの詩に生命を与えるだろう。その起源と古さと発展を語ることによって¹¹⁰。

パキエの見立てでは、フランスの文学は、無知の蔓延とその克服を繰り返しながら、幾度かの盛期を経て、大勢としては彼の時代に向けて進歩している。この巻では語られない古代ガリアを除くと¹¹¹、最初に挙げられる盛期はルイ7世ないしフィリップ・オーギュストからフィリップ美王までの時代である（おおよそ12-13世紀）。長きにわたった蒙昧の時代を破って、フランス語ではアベラール、ラテン語ではレオニウスが現れ、爾後、無数の詩人が輩出した。パキエが特に指を屈するのは『薔薇物語』、そしてティボー・ド・シャンパーニュを初めとするトゥルバドゥールたちである。

ところが、「どんな美しいものでも時が経って無に帰さないものはない¹¹²」ゆえ、アヴィニョン教皇の時代になるとフランス詩もプロヴァンス詩も揃って凋落した。ただ、これは文学そのものの滅亡ではない。プロヴァンス詩の

¹⁰⁹ Suzanne Trocmé Sweany, *op. cit.*, p. 96.

¹¹⁰ *RF*, t. II, p. 1371.

¹¹¹ トリーやフォーシェと同様、パキエは古代ガリアで文芸が栄えていたと考える。第9巻の冒頭は「ガリアのヘラクレス」を引いてこれを總説する(*RF*, t. III, pp. 1709-1712)。セビエ宛の書簡でもローマと古代ガリアを比較している (*Lettre*, I, 12)。

¹¹² *RF*, t. II, p. 1403.

終焉は「イタリア人たちの詩の始まり」となった。「イタリア詩の二つの真の源泉」であるダンテとペトラルカは、「その淵源をプロヴァンス詩に汲む」からである¹¹³。一見したところイタリアに対するフランスの先行と優越を唱えるフォーシェらの主張をなぞるようだが、パキエはむしろ、「学芸や学問は他のすべてのものと同様に、固有の変遷と継起を持ち、国から国へと旅をする¹¹⁴」ことの一例として挙げるにすぎない。

沈滞の時代は、新たな発想や形式の摸索期でもある。フィリップ 6 世の時代以降、韻文でも散文でも言語の洗練が進み¹¹⁵、新たな形式として散文のロマンが現れる。パキエはこれをさほど評価しないが、デュ・ベレー同様、賢明に用いれば「我々の言語の前進と発展」に資するだろうとは述べている¹¹⁶。

14 世紀後半、シャルル 5 世の時代になると、「王国が豊かで繁栄するようになり、文芸もまた力を取り戻す¹¹⁷」。

他のすべてのものが様々な時代に応じて変化するのと同様に、我々のフランス詩は、かなり長い間打ち捨てられたままでいたあとで、その古い幹に、我々の古い詩人たちの誰もがそれまで知らなかった新しい果実を接ぎ木し始めた¹¹⁸。

端的に言えば王侯詩形、バラード、ロンドーなどの新たな詩形が出現したのである。パキエ曰く、これらの詩の複雑な規則を操る精神の働きにおいて、フランスは「榮譽を願うすべての他国に常に卓越している¹¹⁹」。以来、詩と文芸は目覚ましい進展を見せた。シャルル 7 世の代にはシャルティエら¹²⁰、フランソワ 1 世の代にはクレマン・マロやメラン・ド・サン＝ジュレら錚々たる詩人が輩出した。これらは「アンリ 2 世の時代に幾人もの偉大な詩人たちが叢生するための苗床¹²¹」であった。以降、セーヴを露払いに、ペーズやペルティエ・ド・マンが「無知に対して企てられた良き戦争」における「前線」を形成し、「他の詩人たちの先駆け」をなしたのである¹²²。

¹¹³ *RF*, t. II, p. 1399.

¹¹⁴ *RF*, t. II, p. 1382.

¹¹⁵ *RF*, t. III, p. 1519.

¹¹⁶ *RF*, t. II, p. 1399.

¹¹⁷ *RF*, t. II, p. 1405.

¹¹⁸ *RF*, t. II, p. 1399.

¹¹⁹ *RF*, t. II, p. 1402.

¹²⁰ 第 6 卷 16 章には「シャルティエの金言」という章がある (*RF*, t. II, pp. 1228-1231)。

¹²¹ *RF*, t. II, p. 1411.

¹²² *RF*, t. II, p. 1413.

ここに満を持して登場するのがロンサールとデュ・ベレー、そしてその旗幟に従う「ブリガッド」だった。パキエ自身も、1554年に『モノフィル』を刊行してこの列に加わったと自負する。実際のところ、この時点で彼は必ずしもプレイヤー派の一員とは目されていなかったようだが¹²³、いずれにせよ、彼は自分の青春でもあるこの時代を「完全にミュージズたちへと捧げられた」かつてない文学の盛期と誇るのである¹²⁴。『モノフィル』でも既に、イタリアのペトラルカ、サンナザール、ベンボに対してロンサール、デュ・ベレー、ティヤールを並べ、各々が天性に従って多様な文体を取りながら「極めて完璧なものとなったため、詩が、かつてはイタリアに滞在していたのに、いまやこの国 [=フランス] に永遠の居所を定めようとして移ってきたと思えるほどである」と言っていた¹²⁵。ここに及んで前世代の詩形は放棄され、ギリシャ・ローマの古典やイタリアの新しい詩に倣ってオードとソネが持て囃される。喜劇と悲劇ではジョデルやガルニエ、讃歌や英雄詩（いわゆる叙事詩）ではロンサールが古人の墨を摩するに至った¹²⁶。

16世紀後半の世情の混乱も、詩や文芸の前進を止めることはなかった。

アンリ 2 世の死後、宗教をめぐるフランスで起こった混乱が、かつてパルナスの泉から汲んでいた水をいささか掻き乱したが、それでも我々の精神は少しづつ取り戻され、素晴らしい詩人たちを欠くことはなかった¹²⁷。

古い世代の詩人が活躍を続ける一方で、ピブラックやデュ・バルタスといった新しい世代が擡頭した。そしてこれがパキエの記述する世代の下限となる。アンリ 2 世以降の時代について、パキエは敢えて衰亡を語らない。彼自身の生涯と重ね合わされ、あたかも永遠の盛期であるかのように称えられるのである¹²⁸。

¹²³ Catherine Magnien, art. cité, pp. 66-67.

¹²⁴ *RF*, t. II, p. 1413. 1555 年付のロンサール宛書簡でも「今日我々が見ているほど詩人たちが豊富だったことは、フランスでいまだかつてなかった」と述べていた (*Lettre*, I, 8, col. 11B)。

¹²⁵ *Œuvres complètes*, éd. citée, t. II, col. 771.

¹²⁶ オードとソネ (*RF*, t. II, pp. 1414-1416) ; 喜劇と悲劇 (pp. 1416-1418) ; 讃歌と英雄詩 (p. 1418)。

¹²⁷ *RF*, t. II, p. 1413.

¹²⁸ 言語、特に書き言葉に関しては、いまだ不足のあるマロと過剰に走ったデュ・バルタスの間にあるロンサールこそが規範に相応しいとされる。この時代は優れた著者の輩出する時代として、ローマにおけるキケロとウェルギリウス、イタリアにおけるペトラルカとボッカッチョの時代に擬えられるのである (*RF*, t. III, pp. 1525-1526)。

ただ、アンリ 2 世の時代に筆を揮った詩人たちも、パキエが最終的にこの巻を執筆していた 17 世紀初頭になると、彼自身の他にはベーズ、ティヤール、ル・カロンが残るのみだった¹²⁹。ベーズとティヤールが 1605 年に揃って歿したのを受けてパキエは彼らを偲ぶが、同宗派の諸士に略伝や弔詩をふんだんに捧げられたベーズには軽く触れるにとどめ、「私を愛してくれた、そして私が尊敬していた」ティヤールに対して紙幅を割いて同様の義務を果たそうとする¹³⁰。ここでもまた、個人的な情誼が客観的な記述を超えて溢れ出るのである。

盛衰の要因

では、このような文学の盛衰が生じる原因は何なのか？ フォーシェがこれを国家や王家の消長と密に結びつけていたのに対し、パキエの見方はより多面的である。

確かに国家の消長は上に見たように文学の盛衰と連動することはあるし、また、王侯や貴族は時にパトロンとして、時に自ら詩人として大きな役割を果たすのも確かである。パキエは、『薔薇物語』を論じた後で「我がフランス詩は平民たちだけでなく、フランスの王侯や貴族の精神にも宿っていた¹³¹」と言うし、プロヴァンス詩についても、ティボー・ド・シャンパーニュを筆頭に「詩人たちの大半は貴族か王侯で、学者的な詩を見つけるのは難しい¹³²」と述べる。時代が下ってフランソワ 1 世は「文芸の再興者であり、その模範は無数の優れた精神を駆り立てたが、フランス詩についてもそうだった¹³³」上、王妹マルグリットもまた優れた詩人であったため¹³⁴、彼らのもとで文運は大いに高まった。反対に、歴代のプロヴァンス伯の下で栄えたプロヴァンス詩は、詩に無関心なルイ 1 世、2 世が位につくとたちまち衰微してしまった¹³⁵。

¹²⁹ ロンサールの歿後しばらく経った 1589 年のティヤール宛の書簡で既に、パキエは自分たちが「この美しきブリガッドの、フランスでほぼ唯一の生き残り」になってしまったと嘆じていた (Lettre, XVI, 3, col. 461C)。

¹³⁰ *RF*, t. II, pp. 1460-1462.

¹³¹ *RF*, t. II, p. 1388.

¹³² *RF*, t. II, p. 1394.

¹³³ *RF*, t. II, p. 1408.

¹³⁴ *RF*, t. II, pp. 1410-1411. ティボー・ド・シャンパーニュとフランソワ 1 世および王妹マルグリットの例は、書簡にも見られる (Lettre, II, 7, col. 42A-B)。

¹³⁵ *RF*, t. II, p. 1398.

だが、国家の隆盛や王侯の庇護は、文学が興隆するための必要条件ではあっても、十分条件ではない。そこでは卓越した天才の出現が不可欠である。

優れた人々の巡り合いによれば、我々の俗語フランス語に不可能なことは何もない […]。それぞれの言語は生まれつきの特質と美しい話し方を持つが、それは自ずと生まれるものではなく、優れた精神によって育まると、時間とともに豊かになるものである。 […] 言語が我々の筆を高めるのではなく、反対に優れた筆が俗語に、優れた精神が彼らの筆に生命を与えてくれるように¹³⁶。

このような「優れた精神」は、決して孤絶したものではない。彼らは同時代の言語と文学を刷新して余沢を後世に及ぼすだけでなく、天才から天才へと時代を跨いで文学の灯を承継していく。パキエは、自分に近い時代についてはこうした系譜を特に強調する。

ルイ 12 世の時代にはルメール・ド・ベルジュが現れた。

我々は彼に多くを負っている。『ゴールの栄光』のためだけでなく、散文も韻文も、無数の表現によって我々の言語を非常に富ませてくれたからである。そこからは我々の時代の優れた著作家たちもしばしば多くの助けを得ている¹³⁷。

これに続くのは「我らが素晴らしきクレマン・マロ¹³⁸」である。

彼は極めて流暢な才能と、わざとらしくない詩句と、極めて健全な判断力を持っていた。後に現れた人々のように文芸 [の知識] を伴っていなかったが、それを極めて適切にしばしば配置できぬくらい欠いていたわけではなかった¹³⁹。

パキエはとりわけ『エビグラム』と『詩篇』の仏訳を称える。マロはまた、『薔薇物語』を昨今の「軟弱な人々にも読ませるために、我々の時代の言葉を話させようとした¹⁴⁰」点でも優れる。無名氏の優れた詩がしばしば彼に帰されるほどに¹⁴¹、彼の影響力は大きさにおいても広がりにおいても群を抜いていたのである。

だが、パキエが誰よりも高く評価するのはロンサールである。

¹³⁶ *RF*, t. II, p. 1440.

¹³⁷ *RF*, t. II, p. 1406.

¹³⁸ *RF*, t. II, p. 1407.

¹³⁹ *RF*, t. II, p. 1409.

¹⁴⁰ *RF*, t. II, p. 1388. マロは「敬すべき古代」の言葉を尊重して、その痕跡を敢えていくらか残したとされる (t. III, p. 1518)。

¹⁴¹ *RF*, t. II, p. 1433.

彼 [=マロ] はその時代の第一の詩人だったが、ロンサールは何の例外も留保もなく、他のすべての詩人の前に私が置く第一の詩人である。というのも、我々の詩は決して完璧さに達したことも達することもないか、あるいはそこに達したのだとすれば、我らがロンサールのうちにそれを認めなければならないか、のいずれかである¹⁴²。

彼は質量とも他に抜きん出ている。パキエは特にカッサンドラ宛の『恋愛集』と「四季の讃歌」、「ナヴァール王妃の死を悼む讃歌」、「ミシエル・ド・ロピタル宛のオード」を絶賛するが¹⁴³、どんな種類の詩でも古代人を凌駕するか、少なくとも比肩しており、俗語の詩人で並ぶ者はいないとされる。

とはいえ天才の出現には弊害も伴う。優れた詩人が名声を博するや、詩を出世や売名的手段と見る有象無象の摸倣者が現れ、これが詩や文芸の衰頹を招くのである。1555年付のロンサール宛の書簡で言うように、「我々に固有の悪癖は、誰かが幸運にも何かに成功したのを見て取るや、自分も同じ成功にあやかれるという空しい希望と想像に駆られて、その一員になろうとすることだ¹⁴⁴」。例えばジョングルールとは元々、フランドル伯の宮廷を中心に活躍した優れた詩人たちの謂だったが、才能のない輩が紛れこむようになり、時代が下るとただの大道芸人に成り下がってしまった。パキエ自身も若い折、大道芸人たるジョングルールたちがピカルディのショーニの街に日を定めてやってくるのを見たという¹⁴⁵。また、アヴィニオン教皇時代のフランス詩の退潮も、優れた詩人にあやかって「この仕事 [=詩作] に手を染めた、膨大な数の無駄紙屋¹⁴⁶」のせいだった。「無闇と文筆に手を染めるこの著作家の大群が原因となって、我々の詩は徐々に信を失い、かなり長い間フランスで無視されるようになった」のである¹⁴⁷。パキエ自身の時代においてさえ、ロンサールに感化された若者たちがこぞって詩人を称したため、「詩という神聖な名に大きな損害を与え」、一時は詩人というのが蔑称とされるほどになったという¹⁴⁸。ただ、この時ばかりは、ロンサールらがなお健在だったおかげか、文学の盛期は継続しえたのである。

¹⁴² *Ibid.*

¹⁴³ *RF*, t. II, p. 1424.

¹⁴⁴ *Lettre*, I, 8, col. 11B.

¹⁴⁵ *RF*, t. II, p. 1403.

¹⁴⁶ *RF*, t. II, p. 1399.

¹⁴⁷ *RF*, t. II, p. 1393.

¹⁴⁸ *RF*, t. II, p. 1424. 1555年付のロンサール宛書簡も参照 (*Lettre*, I, 8, col. 11B)。

優れた詩人とは？

もっとも、『フランスの探究』の中で、優れた詩人とはそもそも何であるかが明示的に語られることはない。カラジャニス=マゾーは、そこに一貫した基準がないことを前提にした上で、同時代の読者の受容、詩人の学識、国家の（特に言語的な）伝統への寄与、生来の素質、文体の明晰さ、後世の評価といった雑多な要素を列挙している¹⁴⁹。だが、これだけではあまり要領を得ないので、ここではこの問題を論じるジャン・ニコライ宛の書簡（1612年頃）を参照して検討することにした。

この書簡でパキエはまず詩人が天性と技芸のいずれによるべきかと問い、天性を恃むジョデルと技芸に泥むパイフを対置するが¹⁵⁰、これは『フランスの探究』でも既に見られたものだった。すなわち、ジョデルは「驚くべき天性」を有し、「自分の精神を活用するところ、彼には何も不可能はないように思われた」とされる一方で¹⁵¹、パイフは学識と技巧を前面に出し、奇を衒って実験的な詩を作るものの悉く失敗に終わったとされる¹⁵²。優れた詩人は天性を技芸によってさらに錬磨すべきであり、これをまったくき形で実現したのがロンサルだった、というのがパキエの結論である。

同じ書簡でパキエは、弁論家その場の声に頼るのに対し、詩人は文字を用いるゆえに長く後世まで残るとも述べる¹⁵³。『探究』では声と文字を対置することこそないが、読者、とりわけ後世の読者の評価は詩人の真価を量る試金石とされる。例えばパキエがギョーム・クレタンに厳しい評価を下すのは、マロ、ルメール・ド・ベルジュ、トリーら同時代人の称賛にもかかわらず、死後には僅かな名声しかとどめず、あまつさえラブレの嘲笑的となったためである¹⁵⁴。セーヴについても、詩の新たな境地を拓いたとは認めつつ、その作品は「理由なく晦渋」で「その書物は彼と一緒に死んだ」と述べる¹⁵⁵。彼を初めとするフランソワ 1 世の時代の詩人たちは、「一般の人々の

¹⁴⁹ Edith Karagiannis-Mazeaud, art. cité, pp. 40-42.

¹⁵⁰ Lettre, XXII, 2, col. 653A.

¹⁵¹ RF, t. II, p. 1418 ; p. 1489.

¹⁵² パイフはセジュールのない詩を作ったほか (RF, t. II, pp. 1429-1430)、ラテン詩風の韻律の詩も試みるが、「我々の作品が伴うべき自然さを欠いている」(p. 1465)とされる。彼がルイ・メグレ、ペルティエ・ド・マンやラムスに続いて行った正書法の改革についても、パキエは「奇怪」で「支離滅裂」だと一蹴する (pp. 1412-1413)。

¹⁵³ Lettre, XXII, 2, col. 653B-C.

¹⁵⁴ パキエ曰く、「彼はフランス語の韻文でフランス史を書いたが失敗に終わり、彼の残りの作品も同様だった」(RF, t. II, pp. 1478-79)。なお、彼はクレタンを、ラブレ『第三の書』のラミナゴブリスのモデルと考えている。

¹⁵⁵ RF, t. II, p. 1412.

考えよりも自分の精神を満足させることを任としていた¹⁵⁶」点に不足があったのである。クレマン・マロについては、同時代のメラン・ド・サン＝ジュレが宮廷向けの軽薄さに終始して後世に残る作品を作らなかったのに対し、広く江湖の称賛を博し、死後もなお作品が売れ続けている点を評価する¹⁵⁷。パキエの考えでは、一般の読者をまったく捨ておくのは望ましくないが¹⁵⁸、宮廷人の歓心を買うことに汲々とするのは大きな誤りなのである。ロンサルさえも例外ではない。「彼が自分の精神を満足させようと」して書いたカッサンドラ宛の『恋愛集』が「天まで高翔する百ものソネ」を収めるに対し、「宮廷の人々の満足のためだけに」書かれたマリーとエレーヌ宛の詩は出来が劣るとパキエは嘆じている¹⁵⁹。

後世の評価の中でも特に重要なのは、後世の優れた詩人からの評価である。例えばユオン・ド・メリがクレチアン・ド・トロワを、ペトラルカがプロヴァンスの詩人たちを、マロがド・マン以降の過去の詩人たちを、それぞれ称えている¹⁶⁰。優れた作品は後世の模倣の対象になり、さらに優れた作品を生み出す土台となる。ロンサルがウェルギリウスを模倣しつつ「得も言われぬ、驚くほど心地よい優雅さ」に達したのはその好例である¹⁶¹。またロンサルは、ルメール・ド・ベルジュの描いたパリスの審判に想を得た「ナヴァール王妃の死を悼む讃歌」など¹⁶²、しばしば他の詩人から題材や表現を借りるが、これは「とても高貴で熱心な盗みなので、まったく露見を恐れていない¹⁶³」とされる。パキエ自身も、ロンサルに伍そうとすれば「天を攻撃しようとした巨人の仲間になってしまうだろう」と謙遜しつつ、「私は自分

¹⁵⁶ *RF*, t. II, p. 1411.

¹⁵⁷ *RF*, t. II, p. 1409 ; p. 1433.

¹⁵⁸ 一般の読者を念頭に、パキエは古い作品を現代語に直すことにも好意的だった。他所でも、ロワゼルによるエリナンの版が「現代のフランス語になっていないため、万人に快いものではない」と残念がったり (t. II, p. 1383)、第8巻ではヴィラルドゥアンの現代語訳を称えたりしている (t. III, p. 1518)。

¹⁵⁹ *RF*, t. II, p. 1423. 同様の見解は *Lettre*, XVIII, 14, col. 537C-D (1599年頃) にもある。

¹⁶⁰ ユオン・ド・メリ (*RF*, t. II, p. 1391) ; ペトラルカ (pp. 1395-1396) ; マロ (p. 1407 ; pp. 1409-1410) 。

¹⁶¹ *RF*, t. II, p. 1448 ; p. 1456. パキエは、ウェルギリウスをホメロスより上位に置くマクロビウスとスカリジェの説を援用している。彼によるロンサルとウェルギリウスの比較については André Gendre, « Pasquier dépasse la doctrine de l'imitation », *Etienne Pasquier et ses Recherches de la France, Cahiers V. L. Saulnier*, n° 8, 1991, pp. 51-60 参照。

¹⁶² *RF*, t. II, pp. 1406-1407. ルメール・ド・ベルジュをこの「讃歌」の典拠とするのは当時流布していた説だが、根拠には乏しい。

¹⁶³ *RF*, t. II, p. 1424.

の筆において高潔な自由を育んでいる」といって、敢えて同じ主題の詩を作ったことを述べている¹⁶⁴。

ニコライ宛書簡ではさらに、詩人は発想を重んじるべきで、措辞は一般的な用法に従うのがよいとされる。時には新語の導入も許容されるが、パイフやドゥニゾのような極端さは忌避すべきだという¹⁶⁵。この点、『探究』の議論はいささか趣を異にする。優れた詩人には新たな主題の開拓よりもむしろ、新たな文体や形式の摸索、さらには言語の革新が期待される。ルメール・ド・ベルジュやマロについてもそうした面に触れられていた。だが、パキエが最大級の賛辞を贈るのはやはりロンサールである。

彼は我々の言語でホメロス、ピンダロス、テオクリトス、ウェルギリウス、カトゥルス、ホラティウス、ペトラルカを体現する。そして同じ方法で自分の文体を、高邁なものから中間のもの、卑俗なものまで好きなように変える¹⁶⁶。

このようにしてロンサールは、詩のジャンルやそれに適した文体を幅広く試みると同時に、フランス語という言語の表現可能性を飛躍的に拡大した。

神のおかげで、我々の言語は、与えられうるどんな主題についても、ラテン語より脆弱ということはないのである。さらに […] もし我々が多数のロンサールを有していたなら、我々がフランスの詩はローマの古代の詩に何ら譲ることがなかっただろう。なぜなら、他のいかなる詩人も共有しない特別な特権によって、彼はただ一人だけで、好きなだけの詩のジャンルに変化したのである。そこにおいて彼は驚異となり、敢えて言えば、他のすべての者を凌駕した¹⁶⁷。

ロンサールを最高の詩人と見做す点で、パキエは一貫している。ただ、彼をあらゆるジャンルや文体に跨った、詩の達しうる極致とすることは、反面、それ以上の議論を展開する余地を奪ってしまう。優れた詩人を論じるにしても、結局は、ロンサールその人に帰着してしまうのであり、彼に続くものはその跡を踏むことしかできないということになる。パキエ自身もそうであったと自ら認めている。第8巻では次のように言う。

ローマがロンサール以上に偉大な詩人を生み出したことがあるとは、私は思わない。何人かの者たちが、極めて適切に彼の後に従った。 […] 物を書こうとす

¹⁶⁴ *RF*, t. II, p. 1443.

¹⁶⁵ *Lettre*, XXII, 2, col. 654A-C.

¹⁶⁶ *RF*, t. II, p. 1423.

¹⁶⁷ *RF*, t. II, p. 1458.

る者たちは、かくも偉大な人物を鑑とするのがよいだろう。[…] 私自身も、若い時の『モノフィル』、それから十巻のフランス語書簡集、そしてこの『探求』を著すに当たって、同じような希望のもと、これらを提示したのだった¹⁶⁸。

ロンサールを超え、フランスの詩や文芸に新たな局面を開くような詩人は、果たして今後現れるのだろうか？ ニコライ宛の書簡が書かれたのはロンサールの死（1585）から既に四半世紀を闊した時期であるが、パキエはこの点、黙して語らない。彼はただ、ロンサールの同時代人となったことの喜びを言祝い、輝かしき過去の残照を愛おしむのみである。

結論

16世紀後半のフランスには、古典古代に関する素養と文献学的な手法を共有しながら、いわゆる「中世」を含むフランス固有の過去へと関心を向ける著作家たちが現れた。フランスの文学に関しては、トリーによる先駆的な指摘、フォーシェによる学問的な探索などを経て、パキエの『フランスの探究』第7巻がまさにその精華となる。彼はプレイヤード派に連なる詩人として、また「フランス学派」の流れを汲む法律家・歴史家として、フランスの詩と文芸の特質や変遷を、過去に遡って、また古典古代やルネサンス・イタリアの作品との比較を通じて解明しようと試みた。これは、ロンサールを冠とするアンリ2世の時代を究極の到達点とする点や、そこに彼自身の青春を重ね、個人的な追憶や感懐を混ぜ合わせるという点、後代に成立するような「文学史」の枠組に収まらないのは確かである。詩に関する雑多な話題を、脱線や余談も厭わず縦横に扱う巻の後半部はなおさらである。だが、詩のもたらす快楽を賞し、それにまつわる個人的な経験や感興を慈しみ、時に過去の作品を辿り、時に自ら創作を試み、時には読者をも巻きこもうとするパキエの姿勢は、フランスの文学というものが一つの歴史的総体として立ち現れつつあったその時代の昂揚と逡巡をまざまざと示すものとして、今なおその重要性を失うことはない。

¹⁶⁸ RF, t. III, p. 1526.